

緑と暮らす 設計作法

村田 淳 編著



A photograph of a modern building's courtyard. The scene is filled with lush green trees and foliage. In the center, there is a small outdoor seating area with a round table and two chairs. The building's architecture features large glass windows and a white lattice wall on the right side. The overall atmosphere is bright and airy, with sunlight filtering through the leaves.

緑と暮らす 設計作法

村田 淳 編著

目次

緑と暮らす設計作法 村田淳	4
姉の家 1979	10
樹と簀子のコートハウス 1990	14
妹の家 1994	20
親縁住居 2001	26
父が設計した3つの住宅の現在 村田淳	37
小さなコートハウス 2004	38
桜新町・緑庭の平屋 2007	44
北町の方形 2009	52
成田東のコートハウス 2009	58
鎌倉の家 2010	64
中海岸のコートハウス 2010	68
浦和の2つの家 2012	76
植栽を仕事の中に 村田靖夫	84
収録作品データ	86

緑と暮らす設計作法

村田 淳

1. 内と外のつながりの重要性

私が住宅で大切にしていること

家づくりにおいて大切なこととは何だろう。新たな仕事を依頼され、建て主と向かい合って話を聞き、現地に行き周辺状況を確認し、トレペを置いて事務所でスケッチを始める。家づくりと言ってもその主題は設計者によって様々。ひたすらきれいな納まりを追求する人もいれば、一方で自然素材を使えば良い家ができると信じている人、建築としての新しい価値観を追い求める人などもいて実に多種多様である。私の場合は、家づくりにおいて大切なことは「暮らしぶりを考えることだ」と思っている。それは、心地よい暮らしのための設計である。

では、暮らしぶりを考えるとはどういうことだろうか。それは日々の生活をきちんと快適に成り立たせるようにすること。その成立には、プランニング、部屋の色や明るさ、つながり、床や手摺りなどの手触り、収納や

家具などの使い勝手、暖かさや涼しさ、風通しなど様々な事象が複合している。設計とはそれらを整理したうえで矛盾なく成立させる作業とも言えるが、私の場合の中でも「緑と暮らす」ことを大切にしている。

忙しい毎日。家事に仕事に子供の世話……。どれも日々の暮らしに欠かせないことだが、こなしただけで飛ぶように毎日が過ぎていく。家においても、平日は限られた時間しか過ごせない。働き盛りの世代では、窓の外を見る余裕すらなく、それこそ毎日家に寝に帰るだけかもしれない。生活に必要なことは、それで満たしているかもしれない。しかし、こなしただけで暮らすだけでは寂しい。時間がない毎日でも、外の風景を目にすることができれば、花がほころぶ姿や雲の流れに気づき、ゆったりとした時間の流れや四季の変化を自然と意識できるだろう。ささやかなことだが、そういう気づきや意識を持てることがとても大切だと思う。(写1)

緑と暮らすためには、「内と外のつながり」を良くすることが大切。私に設計を依頼する建て主は東京周辺の

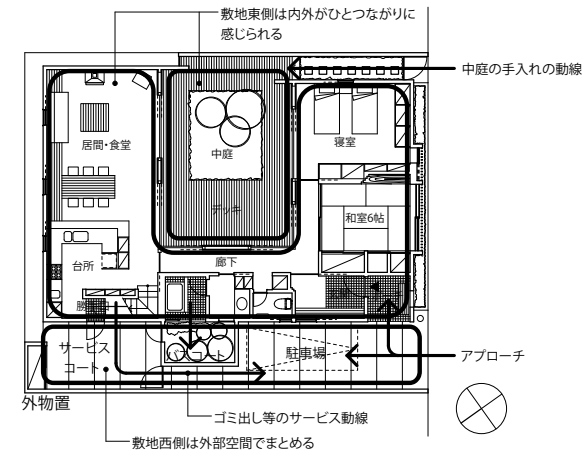


図1 敷地全体のゾーニング計画
(樹と實子のコートハウス) 1/300

方が多いが、都市部で家を建てるために広い敷地を手に入れることは金銭的な負担が大きい。広い庭を持つこともなかなか大変である。一方で、緑を楽しむには内と外のつながりを良くして、ひとつながりに感じたい。けれども、そういった事情から、限られた広さをうまく活かさないとなら、室内が庭の一部のようになり、庭が室内の延長としてあるべき。きらきらと木漏れ日を落とす緑が室内とひとつながりに感じられれば、自然をより身近に感じられるし、敷地全体が居住空間になり面積以上の広がりが見られる。

内と外を等価に扱うゾーニング

内と外のつながりは、建物と外部空間を敷地の中で等価なものとして扱い、同時にゾーニングすることで良くなる。建物の形を優先して設計し、後から余った外部を計画すると、使い勝手が悪く、思うような風景が得られないこともある。例えば庭をつくる場合は、場所により日当たりが変わるし、時間帯によって日の差し方も変わる。また、やがて大きくなる木の大きさに適した広さや植木の手入れのための職人の動線、落ち葉を掃く箒や園芸道具の収納場所など、生活が始まってからの具体的な物事に対応し切れない可能性もある。そして、庭も室内の延長としたいから、どの部屋とどのようにつなげるのかがとても大切。掃き出し窓で自由に入出りできるのか、ピクチャーウィンドウで風景を切り取るのか。求めるものによってあり方も変わるだろう。

だから、基本構想の段階から、外部空間の構成を敷地計画全体のこととして捉え、建物と外部空間を一体のものとして設計する。建物の間取りだけを考えるのではな

く、外部空間の間取りも考えることが必要。庭のことを例に挙げたが、玄関に至るアプローチ動線や日常のゴミ出し動線など人の動きを考慮してゾーニングを行うと、結果的に、限られた敷地を無駄なく使い切ることもなるだろう。(図1)

2. コートハウスの考え方

中庭のある住まい

内と外のつながりを良くすることは、自然と人、内と外の親密な関係をつくり出すことである。室内のインテリアばかりを見て過ごすのは閉塞感があり息が詰まるので、外を見ながら暮らしたいと誰でも思うだろう。だから、プライバシーを守られながら庭の風景を眺め、くつろいで過ごすことができれば自然を身近に感じる親密な関係が生まれる。庭と室内が融合し、室内は庭の、庭は室内の延長となれば、暮らしは室内にとどまらず外へと延長する。庭が生活領域の一部となって、暮らしに様々な変化や豊かさをもたらしてくれる。そのあり方のひとつとして、コートハウスがある。コの字あるいはL字型に庭を囲む住宅をそう呼ぶ。中庭のある住宅をイメージするとわかりやすいだろう。ここに収録した作品は、父・村田靖夫と私が、内と外関係を重視して設計した住宅である。コートハウスでないものも含まれているが、緑と親しみ暮らすという意図は共通している。

中庭を囲むゾーニング

中央採光型のコの字型のコートハウスでは、中庭のまわりに諸室を配置する。そのゾーニングは、採光を重視して中庭の北にリビング棟、南に寝室や個室の棟、それらを水まわりや廊下でつなぐ場合が多い。ただし、その成否は敷地形状や広さにも左右される。南北にある程度の長さがないと、中庭の奥行きが足りずに採光が不十分となり、快適さを目指したつもりがかえってそうではなくなる。光庭として割り切るプランニングもあるだろうが、庭があまりに小さいと通風も阻害される。

水まわりで南北をつなぐことは、家の中の動線計画として効率が良い。居室が南北に分かれるので、中間部への移動距離が少ないからだ。そのうえ、リビングとワンルームでつながるキッチン「コ」の字のコーナー近くに配置すると、自然と水まわりと近くなり家事効率も上がるだろう。

また、コートハウスでは動線が長くなるので、玄関の位置も成否を左右する。条件により変わるが、「コ」の



写1 ゆらゆらと揺れる木漏れ日や明るく照らされた葉など、家の中にも緑を身近に感じられる住まい (小さなコートハウス)

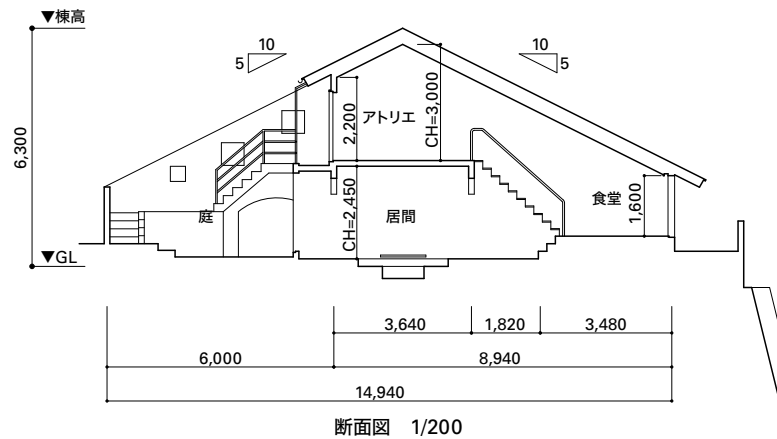


もうかれこれ20年前*の設計である。建て主が隣接する公園に魅せられて買い求めた敷地、その深い森とつながり、大好きな草花を楽しむことを主眼としてつくられている。住まいはその室内だけで考えるのではなく、むしろ外部と一体にし、内外のつながりを求め、必要に応じて新たな形式を考えることが大切と、当時から考えていた。ここでは特にこの考えが強かった。

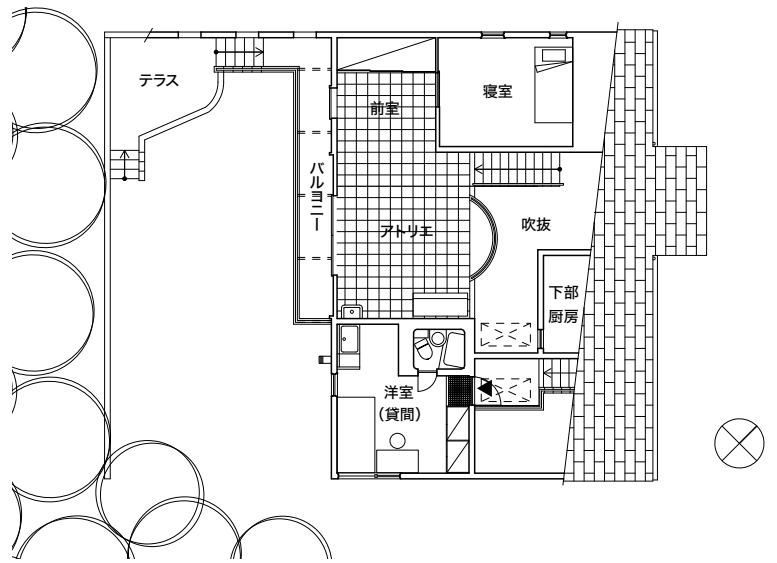
全体は切妻の大きな家、その公園に面した3分の1が廃屋のように崩れ落ちた。残りが住まいだ。崩れ落ちた部分が庭と化し、公園とつながる草の勢いが波のように室内に押し寄せる、そんなイメージを最初にした。それは時の重なりで最初から絡めとられた家と言えようか。

その現実の時を経た今、樹木の成長と草の勢いは想像を超え、まるで太古さながらの自然のままの姿のように庭は時を重ねた。公園の樹木は深い深い森と化し、注意深く手入れされた庭は人の手をまるで感じさせない草むらのようだ。嬉しいことに、地中海の白い家を下敷きにして過剰なまでにモチーフを繰り返した壁は、歳月と拮抗して今でも揺るぎない。住まい手と共に思いを込めて作り、そのたくらみ通りに時を超えた住まいになり得た、と思う。(村田靖夫)

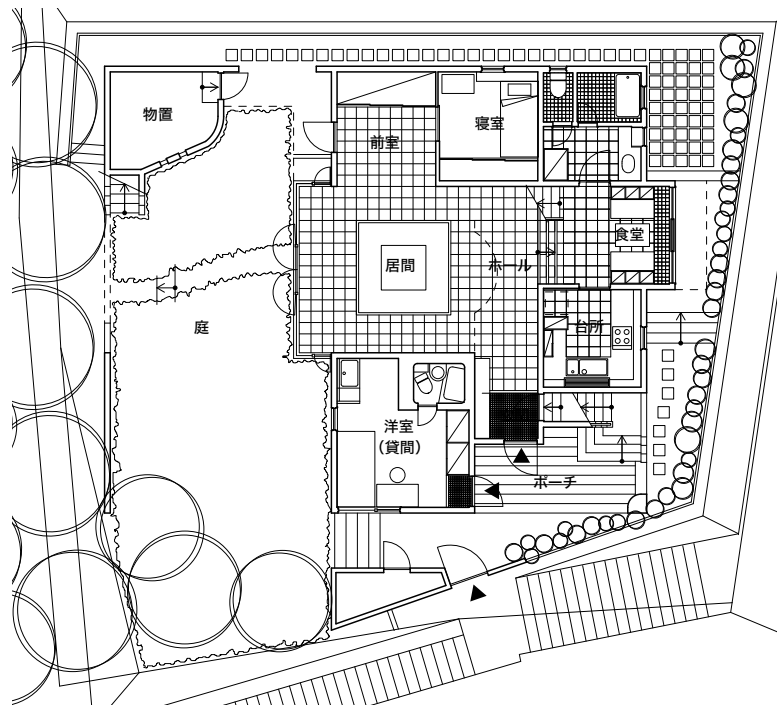
*編集部注：1998年の執筆当時より20年前



断面図 1/200



2階平面図 1/200



1階平面図 1/200



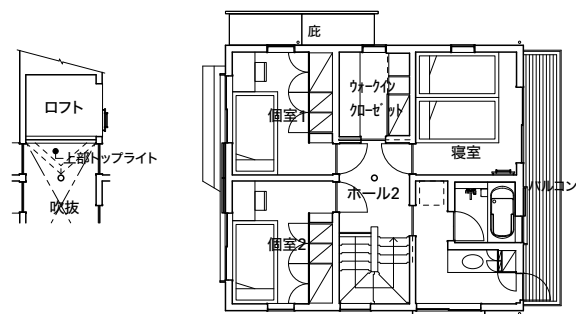
写真キャプション：

P12 北東から見た外観。向こうに深い森のような公園がある。敷地の隅に植えられた大きなハナミズキが街を彩る
P13左上 半階上がった食堂から見る。居間の床は庭

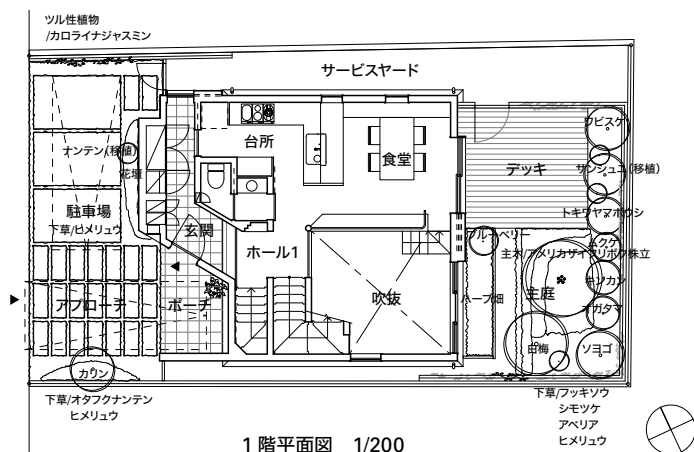
より掘り下げられているので、庭の緑が押し寄せてくるように感じられる。大きな切妻のもとで各室がつながる構成
P13右上 2つの貸し間と共用の玄関ポーチ。正面に見えるハナミズキが道路の突き当たりの視線をやわらか

く受け止める
P13下 公園との結界になる白い壁で囲われた緑深い庭。窓に絡むのはノウゼンカズラ。初夏の撮影となり花が少なく見えるが、春には様々な種類の花が咲き乱れる花園と化す

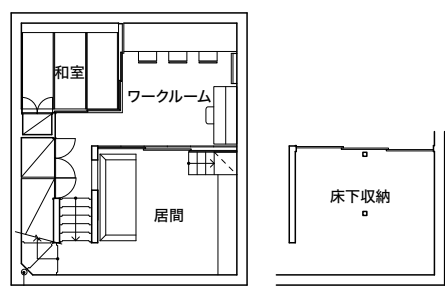




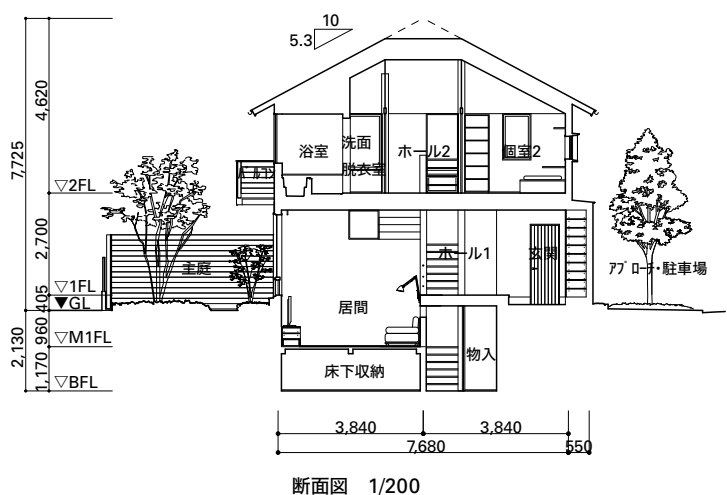
2階平面図 1/200



1階平面図 1/200



地階平面図 1/200



断面図 1/200

手渡してくれた赤い実をほおぼると、口の中にほのかな甘みが広がった。庭の主木に選んだジュンベリーが多くの実をつけ、建て主の子供が嬉しそうに分けてくれたのだ。

敷地は武蔵野の緑が色濃く残る落ち着いた住宅地の一角。形状は東西に長く南面する長さはあるのだが、南にまとまった庭を設けると建物が細長くなり求められた要件を満たせない。ただし、南隣地は旗竿形状で境界近くまで建てても窓先に空き地が残る。熟考の末、敷地中央に建物を配置して東の庭に主に開き、西は植栽を施したアプローチおよび駐車場とする三分割の配置とした。北はサービス動線およびバックヤードである。

この家の特徴は断面計画にある。建て主は、家族が集う空間をリビングとは別に地階に設けること、そして人の居場所が多く生まれることを求めている。地階は暗く閉鎖的では場所の性格としてふさわしくなく、日常の生活空間の延長として気軽に行ける場所としたい。また、内部だけでなく外の風景ともつながった場所としたい。そこで、限られた床面積の枠の中でリビングを半階下げたスキップの構成とし、内外の立体的なつながりと家族同士の結びつきを求めて空間構成を定めている。

1階はキッチンとダイニングで、建具を引き込むことでデッキを敷い

写真キャプション：

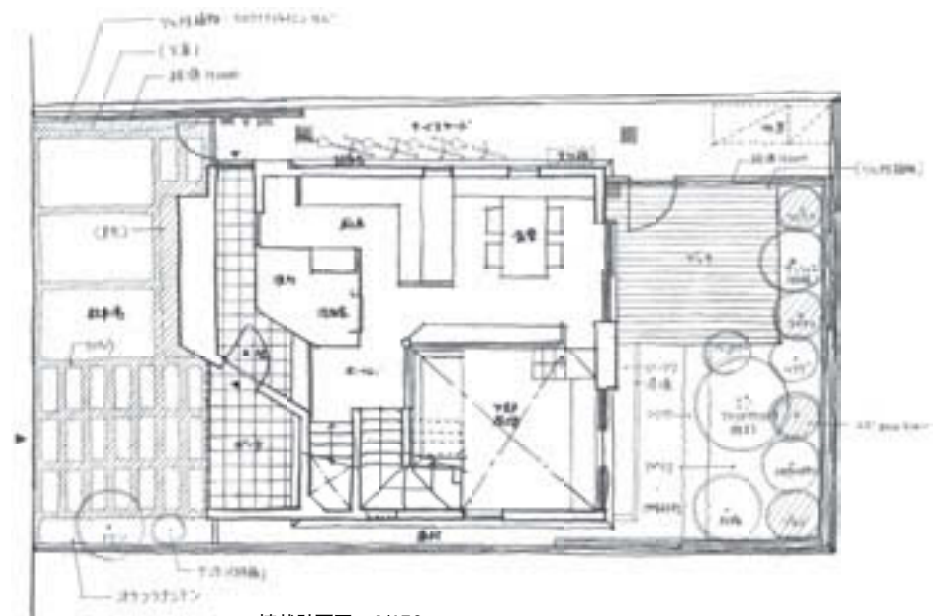
- P54 トップライトから落ちる光で明るく満たされる2階ホール。各部屋からは欄間ガラスとトップライトを通して空が見える。トップライト下部のガラリはたまった熱を排出するチャンバーになっている
- P55上 半階下がった居間から1階の食堂と地階のワークルーム、和室を見る。1階から地階まで回遊できるワンルームの構成
- P55下 道路に面した西面外観。東西に長い敷地を駐車場とアプローチ、住宅、緑豊かな庭に三分割する構成。道路側はまとまった植栽は難しいが、わずかでも施すことで雰囲気が変わる。2階個室の窓には西日を和らげる格子戸を設けている
- P57 庭からデッキを見る。主木は赤い実をつけるジュンベリー。引き戸を壁に引き込んで食堂と一体に使うことができる。左のガラスは居間の窓

た庭とひとつつながりになる。南東の半階下がったところが地面に潜り込んだようなリビングで、1階と地階をつなぐ大きな空間である。地階に光と風をもたらす、家族の気配を感じて声をかけ合える。大きなはめ殺し窓を通して庭とも結ばれ、四季の移り変わりや収穫の楽しさを生活にもたらしてくれるだろう。それぞれ

の場所は立体的な回遊動線で結ばれ、ひとつつながりに連続する。2階は個室群と水まわりで、地階へ続くそれとは平面的にずらされた階段を上がり、頂にトップライトを持つ明るいホールからシンメトリーに配置された部屋に至る。各室からは欄間のガラスを通してトップライト越しに空とつながる。

このように、単純な印象の外観からは想像しにくい変化に富んだ家となった。ただし、地階から2階まで三層がひとつつながりになっているため気積は大きい。そこで、2階の熱抜きおよび地階の湿気対策のためダクトによる換気設備を各所に設けている。(村田淳)

建て主と植栽計画を打ち合わせる際につくった図面。植栽計画も設計のうちと考えている。実際の樹種やこまかな位置は現場で造園家と相談し、変更したところもある



植栽計画図 1/150

